
2020年度
修士学位請求論文要旨

笹川臨風『支那小説戯曲小史』の
依拠する典籍について
—第一篇と第二篇のテキスト分析を中心に—

国際日本学研究科 国際日本学専攻

文化思想領域

4911196001

カン ヒョウジョ
韓 氷如

この論文は笹川臨風『支那小説戯曲小史』の依拠する典籍について、第一篇と第二篇のテキスト分析を行ったものである。

修論のテーマとして笹川臨風の『支那小説戯曲小史』を取り上げたのは、日本で初めての中国戯曲に関する著作であるからだ。しかし、研究が進むにつれ、先行論文では『支那小説戯曲小史』が依拠する典籍についてほとんど論じられていないことに気付いた。これまでの研究は、笹川臨風が『支那小説戯曲小史』で独自の戯曲論を展開したと見なされており、テキストが何を踏まえて書かれているかについてはまったく触られていなかった。

本研究の目的は『支那小説戯曲小史』の論述は何を依拠しているか、作品に即してその材源を明らかにすることである。明治時代では中国の戯曲史について多くの研究書が発表されたが、そのなかでもっと早く刊行したのは笹川臨風の『支那小説戯曲小史』である。中国戯曲史の専門家ではない笹川臨風はなぜ最初の書き手になったのか。また、今までなかった「戯曲史」という概念と用語はどこから来たか。『支那小説戯曲小史』に現れた笹川臨風の戯曲論はどのようなものか、などの問題について、これまでいくつかの論文が発表されてきたが、笹川臨風の中国小説論、戯曲論が何を依拠したか、引用の出典がなにかについてほとんど論じられることはなく、解明すべき点は多く残されている。

そのため、本研究では笹川臨風『支那小説戯曲小史』の第一篇と第二篇、とりわけ後者を対象に、徹底したテキストの解説を行った。『支那小説戯曲小史』のどこが笹川臨風の自分の言葉で、どの部分が引用なのか、その引用はどの作品からのものかなど、一字一句まで実証的に考察を行った。

その目的に合わせて、本論文は「はじめに」と「おわりに」を除いて六章から構成されている。「はじめに」では、問題提起、先行研究の概要、研究の目的などを扱い、第1章は先行研究の概要とそれに対する筆者の考察である。第2章では『支那小説戯曲小史』の第一篇を取り上げている。第一篇は総論にあたり、中国の小説と戯曲に対する笹川臨風の見解がもっとも多く示されている。そのため、第2章では笹川臨風の小説論と戯曲論をめぐって、作品批評を試みた。第2章は「テキスト分析」という見出しをつけたが、それは形式の統一をはかるためで、論じ方は第3章以降とやや性格を異にしている。

本論文の第3章から第6章までは『支那小説戯曲小史』の第二篇についてのテキスト分析である。この四章は第2章と違って、笹川臨風が依拠した典籍を明らかにするのが目的である。第3章は第二篇の論述の特徴を検討し、その上第二篇第一章「概説」と第二章「雑劇」の構成、内容と出典について分析を行う。第4章では第二篇第三章『水滸伝』及『三国志』を中心にテキスト分析を行う。第5章は第二篇第四章『西廂記』を扱うが、この章では笹川臨風が『西廂記』の原文を引用しながら、作品紹介をしているため、引用と出典についてテキスト分析を行う。第6章は第二篇第五章『琵琶記』を扱うが、この章で

も作品と原典について照合する作業を行う。

『支那小説戯曲小史』は戯曲論を中心とした書物で、そのもっとも重要な部分は元代を扱う第二篇である。ところが、テキスト分析を通してわかるように、笹川臨風の元代戯曲論は一連の問題があることが明らかになった。

まず、元代の雑劇の概論は詞の韻律の紹介に偏っており、戯曲と直接的なかわりのないことに筆墨が費やされている。また、本論文の第4章で論じたように、小説は『水滸伝』と『三国志』、戯曲は『西廂記』と『琵琶記』の四作だけを論じるにとどまっており、元代の小説戯曲の全体像を示したとは言い難い。当時の中国小説と戯曲研究の水準を考えるやむをえない部分もあるが、笹川臨風のほとんどの論述が引用によって成り立っており、独自の見解は示されていないことが、本論文の『支那小説戯曲小史』第二篇についての考察によって明らかになった。

これまで『支那小説戯曲小史』は初めて中国戯曲史として注目され、研究されてきたが、その中身に立ち入った論考はほとんど見られない。本論文はその空白を埋めるべく、『支那小説戯曲小史』における中国の小説や戯曲論の出典について考察を行った。とりわけ『支那小説戯曲小史』第二篇の分析に見られるように、笹川臨風の中国小説戯曲論はほとんど引用に止まっていることが明らかになった。

『支那小説戯曲小史』全書を見ると、前半の第一篇と第二篇は八十八頁あり、後半の第三篇と第四篇は七十頁ある。前半は半分以上の分量を占めているだけでなく、内容的に見ると、戯曲についての笹川臨風の主な論点は前半に集中している。その意味では笹川臨風の中国戯曲史に関する観点を分析する上では、第一篇と第二篇はより重要で、本論で第一篇と第二篇を対象としたのはそこにも理由がある。

前述のように、筆者は当初、中国における『支那小説戯曲小史』の影響を研究テーマにしていたが、研究を進めているうちに、先行研究で抜け落ちているところに気付いた。すなわち、『支那小説戯曲小史』は何にもとづいて書かれたということである。調べているうち、『支那小説戯曲小史』には引用が多だけでなく、中国の明清時代の戯曲を踏まえた論点も数多くあることに気付いた。これは本研究における最大の発見である。

先行研究ではいずれも笹川臨風が独自の作家論や作品論を行ったという前提で『支那小説戯曲小史』を論じている。これまでの調査によって、『支那小説戯曲小史』のなかにオリジナルな観点がほとんどないことが判明された。したがって、笹川臨風をめぐる先行研究の作家論や作品論の前提はいずれも崩れることになる。そのことはこれまで誰も指摘したことがない。その意味では、本論文は明治三十年代の日本における中国戯曲研究に大きく貢献することになるであろう。

『支那小説戯曲小史』は四篇構成になっており、本論文の扱う対象は第二篇までである。

それには二つの理由がある。一つは時間の制約である。第二篇以降のテキスト分析は出典探しを中心としているが、一つの出典を探すのに長い時間がかかる。限られた時間のなかで、『支那小説戯曲小史』の全篇のテキスト分析を行うには限界がある。もう一つは修論の扱える範囲である。修論では第一篇と第二篇を扱っただけでもかなりの分量になっている。『支那小説戯曲小史』の全篇を扱うには、当時の漢文学研究や文学史の言説の展開なども視野に入れる必要がある。修士課程を修了した後も引き続き、第三篇と第四篇の材源の解明に取り組み、将来、博士課程後期で勉強する機会があれば、上述の問題について検討したいと思う。